

---

# ハヤテのごとく！～バレンタインデーの懲りない人たち～

dandyy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテの「ごとく」～バレンタインデーの懲りない人たち～

### 【NZコード】

NZ8465J

### 【作者名】

dandy

### 【あらすじ】

たつた1日に想いを馳せる1話完結型の話です。

## ヒナギクの場合（前書き）

……なんなんでしょうーね？これは？想像妄想100%ストーリーの始まりです。てか連載小説にする必要があつたのだろうか…。まず1人目はこの人です。

## ヒナギクの場合

それは…数年前…

「ヒナギク」

「…美希?…どうしたの?」

私はその日塾に来ていた。同じ教室で勉強していた友達の美希に帰り際に声をかけられた。

「今日はその…バ、バ、バレンタインデーだな…」

「そうね」

「ヒナギクは誰かに渡したりするの?」

「私?…うーん…。一応お父さんにあげようかなって 美希は誰かにあげるの?私と同じでお父さんに?」

「いや…お父さんは今日は帰らない。仕事で出張だから…。そ、それより…」

「ん?」

その時美希は恥ずかしがりながらなにかを渡したそつだった…。だけど私はなにかわからず…。

「どうしたの… 美希?」

「いや… その…」

教室で一人向かい合つていると他の教室から女の子が2、3人入ってきた。そして私を見るやすぐ近づいてきた。そして…。

「桂ちゃん…は…」れーチョ ノートあげるよ…」

「私も…」

「ええっ…?」

いきなり、しかも女の子からチョ ノートを差し出され私はちゅうと戸惑つた。

「え？ なんで私に？ 男の子にあげるんじゃ…」  
「だつて桂ちゃん、すじくかつこいいから…」  
「私もいつも憧れてて…」  
「とにかく受け取つて！」

「あ、うん…ありがと…」

私は同級生からチョ ノートをもらつたがいまいち変な感じだつた。その様子を美希がじつと見ていたのを私が気になつた。そこで私は笑いながら美希に話しかけた。

「なんか妙ね。女の子から私がチョ ノートもらつなんて…」  
「妙…？ 嬉しくはないのか？」  
「まあ嬉しい」とは嬉しいけど…」  
「そつか…。じゃあ私は迎えが来る頃だから…」

そう言つと美希はカバンを持って外に駆け出していつてしまつた…。私は美希がなにをしようとしていたのかその時はまだわからなかつた…。

数年後…。高校生になつた私は相変わらず毎年バレンタインデーにはチョコレートをもらつっていた。そして…。

「じゃあ私がらも…」

「えっ！？」

「一生懸命食べてね」

美希からもチョコレートをもらつてしまつた…。机の上に山積みにされたチョコレート…。一体私はいつになつたら男の子にチョコレートをあげるよつくなるのだろうか…。

## ヒナギクの場合（後書き）

「友チヨコ」をもらつたらこうなるのだろうか…といつ妄想です。大丈夫！頭はすでに溶けてますから！！チヨコが溶けるのと脳みそが溶けるのと掛けでます。…どーでもいい。あと何人か続きます。

## クラウスの場合（前書き）

バレンタインティー一つからあるんだるーか…。間違いなく60  
近いオッサンはあまり意識しないでようかど…。まあそこはナア  
ナアでいきます。

## クラウスの場合

「これはまだ私が屋敷で存在感を放っていた頃…」

「クラウスさん」

「おお。マコアよ。どうしたんだ？」

屋敷の廊下で三千院家当主帝様に面てうまれていてマコアの声をかけられた。

「今日はバレンタインデーですからクラウスさんにもチョコレートを作りました」

「マコアが？」

「はい！食べてみてください」

マリアに渡された小さな箱を開けるとそこにはハート型のチョコレートがあつたのだ。私はすぐにチョコレートを一口食べた。味はもちろん…

「うん…うまいな。なかなかよくできてる」

「本当ですか…？良かつた…」

その時のマコアの笑顔がとても印象的だった…。

そして現在…。

「マリアよ」

「なんですか？クラウスさん」

「お嬢さまが学校を休んだようだが… 一体綾崎ハヤテはなにをしているのだ！！これは責任を追及し」

「まあまあクラウスさん。今日はほら… 2月14日なんですよ？」

「2月14日…？」

私はその時思い出した。バレンタインデーといつものを。久しく忘れていたその言葉。私の胸は踊るようだった。

(や、そつか…お嬢さまはもしゃ私のために…)

気になつた私は自然と足がお嬢さまのいる部屋へと向かつた。『立ち入り禁止』と書かれた紙。それを知りながら私は扉をちょっと開き中をそつと覗き見た。

「くそつ…ダメだ！納得がいかん…！…こんななんじや私の愛は伝わらん…！」

(なんと…お嬢さま…)

私は目頭が熱くなつた。泣きそつこなるのをグッといりえる。しかし私は次の言葉に耳を疑つた。

「ハヤテへの想いをこのチョコレートに……！」

ハヤテへの想い……？ そう……。お嬢さまは私にバレンタインデーのチョコレートを作つてなどいなかつたのだ……。無駄に期待した私は肩を落としとぼとぼと屋敷の奥へと消えていった。その存在感と共に……。

## クラウスの場合（後書き）

期待とは裏切られるものである。…なんかいいこと言つたよつな言  
わないような。期待とはした分だけ裏切られたときのショックも大  
きいといつ…ね。やかましいわ！！

## 薫先生の場合（前書き）

99%もられないとわかつてはいても残りの1%に希望を持つていました。つまり人間100歳まで生きりや1回くらいは本命をもらえるという…苦しい言い訳。

## 薰先生の場合

「は？ 今日が何の日かって？ なによこさなり。 給料日、じゅあるまこと…」

俺はいつものように無理やり飲みに連れていかれたあいつに聞いてみた。もちろんすでにもう酔っている。

「私はね、給料日とあと何日かしか大事な日は覚えていないのよ」「…今日はあれだ。バレンタインデーだよな…」「バレンタインデー？」

「…お、お前は誰かにチョコレートあげたりしたのか？」

さりげなく、いや、結構堂々と彼氏の有無を聞いてみた。まあこんな所で飲んでる時点でいるわけがないだろ？ が…

「あげるわけないじゃない。何？ あんたは一個ももらつてないから欲しいわけ？」

「な、なんで一個ももらつてないって決めつけてるんだよ…」

「じゃあ貰ったの？」

「…こや、ない…」

「ないことはないのだが勝手に〇〇と決めつけられるのは癪だった。無駄な意地だ。

「まあ昔からオタなんあんたがバレンタインデーにチョコレートなんかもらえるわけないわよね」

「…お前はどうなんだよ。好きな男とかいねーのかよ」

「こるわけないじゃないー私が好きなのはお酒とお酒を飲んでる自

分だけよ……さつきからあんたおかしいんじやない?」「な、なんだと!?

たしかに酔つてこるとほこえ自分で変だと思つたが……。

「さて……そろそろ帰るわよ。お勘定ようじく~」

「言われなくともわかつてゐるつづーの……」

俺はいつものように一人分の勘定を払い店を出た。

「じゃあな。氣をつけて帰れよ」

「……ひょっと待つた」

俺は足を止め振り返る。なにかと思えば雪路が俺の右手になにかを握らせた。

「……なんだ、これ?」

「あめ玉よ」

「あめ玉…?」

「バレンタインティーにチョコの一つももらえないんじやかわいそうだから私がそれあげるわよ。んじや~」

そう言って雪路は家……といつても白皇の宿直室へと歩き出した。俺はじつとあめ玉を見つめていた。チョコレートだろうがなんだろうが関係ない。あいつからバレンタインになにかをもらえただけで俺は嬉しかったのだから……

「……つて、これ! 今の飲み屋で配つてたあめ玉じやねーか……」

## 薰先生の場合（後書き）

まあ何もあげるのはチョコレートじゃなくても構わないと2010年2月13日朝放送の主に宇宙ガールが活躍するアニメでも言つてましたから。つまり：金？

## サキの場合（前書き）

熟年夫婦は2パターンありますよね。年をとる「」と「一人の仲が深まる人たちと年をとる」という二つのパターン。私はどちらにもあてはまらない。なぜなら仲良くなるまで一緒にいなから。

## サキの場合

「若と出会ってから最初のバレンタイントー…。私は手作りチョココーンートをプレゼントしたんですよ。」

「若　はい。どうだ？」

「…なんだ、これ？」

「なにして…チョコレートに決まってるじゃないですか。今日はほら…バレンタイントーなんですよ?」

「…ああ。2、3日前からコンコン作ってたアレが」

…どうやら内緒で作っていたチョコレート、若にはバレていたみたいで…

「…」「…」  
「ミルクキャラメルラッピングまで…。どうせ開けるんだからなくともいいの」「み、見た目は結構大事なんですね…。とりあえず…食べてみてくださいよ」

「ん。ああ」

私は若がチョコレートを食べるのをドキドキしながら見ていた。きっとつまづいていたはずだと信じて。でも…

「うわっ！？お前これ味見とかしたのか！？」

「してるわけないじゃないですか！？せつかハート型になったのに食べたら欠けちゃうじゃ…」

「形の問題じゃねーよ…。これ塩だろ…。どんだけベタな間違いしてるんだお前は…！」

「す、すみません…！…すぐこ片付け」

私は顔を真っ赤にしながらチョココレートを片付けようとした。  
けど若が右手で私を制し、こう言つたんです。

「…だからって食えなくはねーよ。死ぬわけじゃないんだしよ」  
「けど…」

「今度は間違えるんじゃねーぞ。俺だから良かつたもの…好きな奴にこんなチョコレート渡したらマジで嫌われちまうぞ」

そう言つて若は私の失敗作のチョコレートを食べ続けてくれました。  
そんな若にいつか「おいしい」と言つてもらえるよう私は毎年チョコレートを作り続けているのです。私にとつてバレンタインティーとは自分を成長させてくれる1日なんです。

## サキの場合（後書き）

なんか次第にコンセプトがわからなくなつてきました。  
…おい！次はちゃんとやります。

熟年夫婦つ

## 泉の場合（前書き）

みなさん。思い出してみてください。一番最初に好きになったのは大抵お父さんかお母さん。だから両親はいつまでも大切に…え？うるさい？失礼…。

## 泉の場合

それは…私が初めてお父さん以外の人にバレンタインバーのチョコレートを作っていた時…

「泉~」

「なあに?お父さん」

「虎鉄から聞いたんだが…チョコレートをたくさん作つてこるというのは本当か?」

「うん~」

キッチンにはたくさんのお父さんのチョコレートの型もたくさん用意していた。

「やつか~。お父さんも」んなにたくさん泉からチョコレートをもらえてうれしいな~」

「ほえ?…お父さんもあるけど、他の人にあげるんだよ~」

「な、なあに!~?」

いきなりお父さんの顔は鬼の形相になっちゃつて…

「まさか…好きな男にか!~?」

「ち、違うけど…。前に話した…男の子!~?」

「い、泉がキスした男にか!~?」

「うん お父さんがそんなお礼しちゃダメって言つから…チョコレートを作つてあげるの」

「や、そいつはどこにいるんだ!~?」

「うーんと…わからないけど商店街にもいたし、あつた辺の近くで住んでると思つんだ」

「うん~」

私はワクワクしながらチョコレートを作り続け…

2月14日

「それじゃあ虎鉄くん。行ってくれるよ  
行くって…例の男の子を探しにか?」  
「きっとまた商店街あたりで会えると思うから…」「  
そう言つてもう何日も経つじゃないか  
「もー…あいつと今日は会えるよー…」

私は胸を踊らせ商店街へ向かつた。そしたら……

日本刀片手にお父さんが私にチョコレートを渡せまいと暴れていった。その年以来私は他の男の子の話をお父さんの前ではしなくな

つたの…

「エリカちゃん、おはようございます。」

## 泉の場合（後書き）

授業参観にこないでとか運動会にこないでとか言わないの。 いつか  
はあなたを応援してくれる人なんて誰もいなくなってしまうのだから  
ら。 悲しい。

## 千桜の場合（前書き）

なにもバレンタインデーに興味がないのは男性だけではない。たぶん。女の子がみんな光り物好きとは限らないということです。私は光り物好きですよ。アジとかコハダとか…あれ？

## 千桜の場合

バレンタインデー。そんなもの私には無縁だ。街ではバレンタインにあやかりチョコレートの特設コーナーがたくさんあるのをただ横目で眺めるだけだ。

(…こんなに高いチョコレートはどうあるつもつだ?しかも義理だろ?  
~さうか…見栄か)

冷めた感情で私はチョコレートを選ぶ女を見ていた。まあ私なんかには縁のない話だが…。

(しかし一回チョコレートをバラバラにして自分でまた作り直すだなんて…。なにを考えているんだ?)

手作りチョコレートには味の代わりに愛が詰まっているというが私はよくわからん。愛があるかどうかなんて所詮はわからない。なら手っ取り早く判断するのは味だろう。

(あ…白皇は金持ちはかりが通う学校だしスーパーでチョコレート買つなんてことはないだろうな…)

そして私はそのままスーパーですら素通りして家に帰る。今日は生徒会の仕事もない。やはりバレンタインデーだからなのか?

(いや…まさかヒナギクに限って放課後誰かにチョコレートを渡すなんてないだろ?…)

私にとってはうれしい限りだ。こんな日には家に帰つてひたすらゲ

ームをするに限る。浮き世でなにが起きようと私には一切関係がないのだから。

## 千桜の場合（後書き）

要はね、女の子も「りぼん」とかそーいひ雑誌じゃなくて「ジャンプ」も読むつてことよ。…なんか違うな。といつあえずみんながみんな同じものを好きになるとは限らない。

## ハヤトの場合（前書き）

「どうしてバレンタインカードなんてあるんだが…」。その答えをまだ見つけられません。

## ハヤテの場合

数年前のバレンタインデー…

「よしー! できた!」

僕はひたすらにチョコレートを作っていた。誰にあげるわけでもない。機械的に大量生産していたんだ。

「いやー。わすが綾崎くん。とてもアルバイトとは思えないよ。高校生でこれだけできるなんて信じられないなあ」

「あはは…。どうも」

店長にほめられた僕だが内心はヒヤヒヤしていた。なぜなら本当はまだ中学生。学費を稼ぐために仕方なく年齢を偽っている。バレたら間違いないクビだろう。だけどこんなに仕事をもらえるバイトなんてそうあるもんじゃない。辞めさせられるわけにはいかないんだ!

! そう思いながらひたすらにチョコレートを作り続けた:

そして…

「私にチョコを作つてプレゼントしてくれ」

「はー?」

なんの因果か僕は働いているお屋敷のお嬢さまからバレンタインデーのチョコを作るよう言われた。チョコを作るなんてことは造作もないことなんんですけど…僕がバレンタインデーにチョコを作らなくなるのは一体いつになるのでしょうか…

## ハヤテの場合（後書き）

バレンタインデーは寒くて動きたくない2月をちょっとでも好きになるように仕組まれた罠なんだろうな。適当。

## マニアの場合（前書き）

めちゃくちゃになつた部屋を片付けるのがつまらん…

## マコアの場合

「ではマコアさん。おやすみなさい」

「え、ええ…。おやすみなさい…」

まさかハヤテ君からバレンタインのチョコレートを貰うだなんて…。  
はあ…。こんなにこじて風邪を引いてしまいますしお屋敷に戻りますか…。それに私にはまだやることが…。

「これ…どうしましょう…」

夢中になつてたとはいえ私が作つてしまつたチョコレートの山、山、  
山…。こまさらハヤテ君に…つていうのもなんだか気が引けてしま  
いますし…。でも捨てるのももつたといい…。

「困りましたね…。あ そうですわ 」

次の日の休憩時間…

「さて… ティータイムは紅茶とチョコレートとこあますか」

冷蔵しておいた不死鳥型のチョコレート。… つん なかなかおいしいじゃないですか

一日後…

「… 今日は… 昼食を抜きましたから食べても大丈夫ですよ…」

「… なぜ… こんなにたくさん作ってしまったのかしら…」

二日後…

「… なぜ… こんなにたくさん作ってしまったのかしら…」  
だんだんチョコレートと向かい合いつのが鬱になつてきましたわ…。  
しかも自分で作ったチョコレート…。どうしてバレンタインデーが  
終わつてから苦労しなければならないのかしら…。

## マコアの場合（後書き）

「作りすぎたからあなたにあげる」そんなお隣さんにおすそわけみ  
たいなカンジでいいからなにかをもらいたいのです。

## ナギの場合（前書き）

トコはやつぱりお嬢ちゃん。9話書きましたがまあ出来はいいのと悪いのと差がありますなあ…。最後までお付き合いいただきありがとうございました。最後に一言！ハッピーバレンタイン！…やかましこ…？

## ナギの場合

それはまだ私が海外で生活していた頃の話…

「ナギ～」

「ん？ どうしたのだマリア」

「お電話ですよ」

部屋でローブをしていた私をマリアが呼んでいた。片手には電話器が握られていた。

「誰からだ？」

「日本にいる帝おじここればかりですか」

「切れ」

「…そんなこと言わないで… でてください」

「仕方ないなあ…」

私は渋々受話器を取る。

『おお！ ナギか。元気か』

「なんだクソジジイ。私の健康の心配より自分の身を心配したらどうなのだ？ どうせもう先は長くないのだからな」

『つれないの。とにかくナギよ。近々日本に帰る予定はないのか？』

『…』

「ない。寒いし暖かくなるまでは帰らん」

『もうすぐバレンタイン♪ トージャー』が。チョコレートの一つや二つ

…』

「誰がお前なんぞにチョコレートをあげるかあ…」

ブチッ！

私は速攻で電話を切り戸惑うマリアに電話器を渡した。

「おじいさまは何と？」

「ぐだらん用事だ」

「…でもそれではすねてしまわるので私がチョコレートを作つて日本に送つておきますね」

「ああ。悪いな」

私はバレンタインデーになどなんの興味も示さず生きてきた…

しかし…

「なぜだ…。うまくいかない。チョコレートを作るのは想像以上に難しいのだな…」

私も大好きな人にバレンタインデーのチョコレートを作る女の子になっていた。しかしいかんせん料理が下手な私はマリアのようひたくない。

「むむ…- めだめだめだ…- こんなもんで愛が伝わるものか…-」  
「こんなひどくなるなり普段からひらひらと料理を学んでおけば良かつ  
た…- 軽く後悔してこむ。みていろ！来年こそはやっとコロッケ  
ーを作りプレゼントしてやるのだ…ハヤテH-…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8465j/>

ハヤテのごとく！～バレンタインデーの懲りない人たち～  
2010年10月9日19時20分発行